



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.118

2013.7.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と土器の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

阿玉台式土器

— 東関東に花開いた特異な中期縄文土器 —

塚本師也

第8回

阿玉台式土器の細分(2)

〈阿玉台Ib式土器〉

既に述べたように、隆帯に沿って単列の角押文を施す第I類土器で、a種の発達した型式がb種(阿玉台Ib式)とされた。木之内明神貝塚Aトレンチの第一純貝層から出土し、以下の層出土のIa式と層位関係が把握された。阿玉台貝塚Aトレンチでも、Ia式より上部の貝層から発見された(西村1969・1970・1972)。

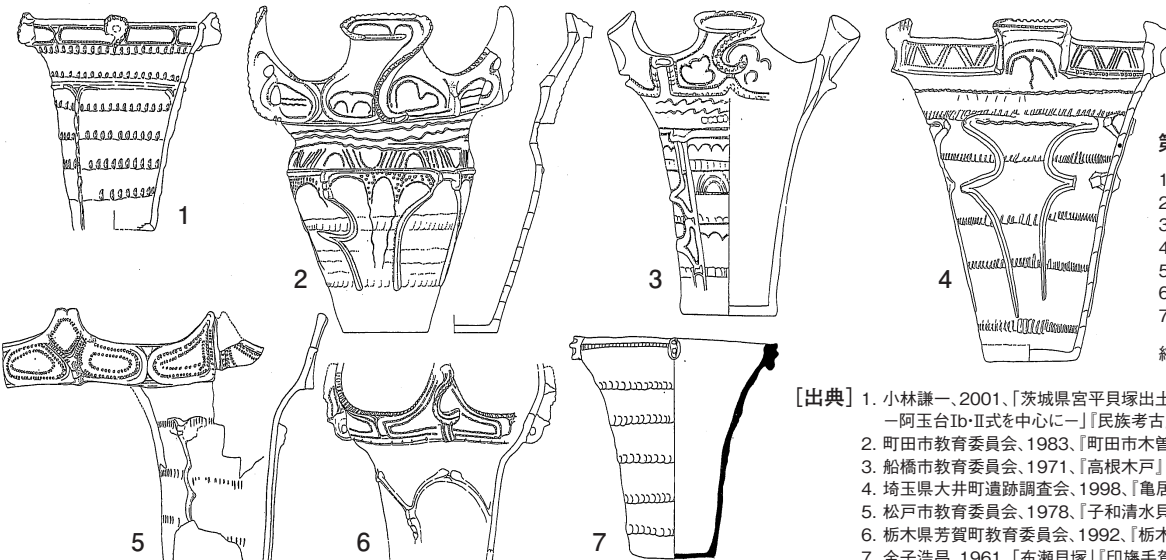
阿玉台Ib式になると、口縁部区画文、頸部素文帯、体部懸垂文の分帯が確立する。平縁と波状縁がある。平縁の土器は、口縁の楕円形区画文の間に、4単位の扇状把手を配すものが特徴的にみられる(第4図4)。区画接点の上部に皿状の小突起を付けたものもある(第4図1)。波状口縁の土器は、区画の接点部分が上方に迫り上がった形が多く(第4図5・6)、五領ケ台式の系譜を引く阿玉台Ia

式の波状口縁とはやや趣きを異にする。波頂部に皿形の突起を付け、そこから渦巻状の隆帯を垂下させるものもある(第4図2・3)。この種の土器は、頸部が括れ、体部が膨らむ甕形の器形が目立つ(第4図2)。頸部は無文を基本とするが、角押文を横位、弧状に施すものがみられる(第4図2~4)。体部懸垂文のうち、直線的に垂下させるもの(第4図1)、逆U字状のものは以後阿玉台式終末まで続く。弧状の屈曲を繰り返すもの(第4図5)は、次期のII式期まで特徴的にみられる。体部にヒダ状圧痕を施すものが目立つが、Ia式と比べて間隔を開けたものが多い(第4図1・2・4・7)。ヒダ状圧痕の押捺部をキザ目としたものもある(第4図5)。簡素化された深鉢形土器として、V字状の突起、粘土棒を芯としてこれを粘土帯で囲った突起、魚鱗状の突起を付けただけのものがある(第4図7)。

阿玉台Ib式土器は、佐藤達夫以来2細分されることが多い(佐藤1974)。筆者は、古段階は波状口縁が低調で、区画接点上方に皿状の小突起を付ける平縁深鉢(第4図1)を代表例と捉える(塚本2000)。一方、新段階には、波状口縁が発達し、区画内部への角押文の施文が盛んになると考える。

阿玉台Ib式のみで構成される一括資料は多数確認されている。千葉県中山新田遺跡081・091号住居跡、茨城県前田村遺跡365号住居跡が古段階、千葉県高根木戸遺跡第72号住居址、同県草刈遺跡A区50号住居址、同県子和清水貝塚252号住居跡、栃木県免ノ内遺跡SI-005が新段階の例としてあげることができる。

阿玉台Ib式土器は、阿玉台式土器の特徴を最も如実にあらわす、最も阿玉台式らしい土器と言える。



第4図 阿玉台Ib式土器

1. 茨城県宮平貝塚
2. 東京都木曾中学校遺跡
3. 千葉県高根木戸貝塚
4. 埼玉県亀居遺跡
5. 千葉県子和清水貝塚
6. 栃木県免の内台遺跡
7. 千葉県布瀬貝塚

縮尺: 1/10

- 【出典】 1. 小林謙一、2001、「茨城県宮平貝塚出土土器について(2) —阿玉台Ib・II式を中心に—」『民族考古』第5号
 2. 町田市教育委員会、1983、「町田市木曾中学校遺跡」
 3. 船橋市教育委員会、1971、「高根木戸」
 4. 埼玉県大井町遺跡調査会、1998、「亀居遺跡」
 5. 松戸市教育委員会、1978、「子和清水貝塚 遺物図版編1」
 6. 栃木県芳賀町教育委員会、1992、「栃木県芳賀町 免の内台遺跡」
 7. 金子浩昌、1961、「布瀬貝塚」『印旛手賀』早稲田大学出版部

【参考文献】

- 佐藤達夫、1974、「土器型式の実態—五領ケ台式と勝坂式の間—」『日本考古学の現状と課題』吉川弘文館
 塚本師也、2000、「茨城県における縄文時代中期中葉の土器について—つくば市中台遺跡と谷和原村前田村遺跡の調査成果から—」『常総台地』15、常総台地研究会
 西村正衛、1969、「千葉県小見川町木之内明神貝塚—東部関東における縄文中・後期文化の研究—其の一」『早稲田大学教育学部学術研究』第18号
 西村正衛、1970、「千葉県小見川町阿玉台貝塚—東部関東における縄文中・後期文化の研究—その二」『早稲田大学教育学部学術研究』第19号
 西村正衛、1972、「阿玉台式土器編年の研究の概要—利根川下流域を中心として—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第18輯、早稲田大学大学院文学研究科

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

目次

- | | | | | | |
|----------|--------------------|---------|----------|-----------------------|---------|
| ■阿玉台式土器 | 阿玉台式土器の細分(2) | 塚本師也 …1 | ■リレーエッセイ | マイ・フェイバレット・サイト(第111回) | 村井 実 …3 |
| ■考古学の履歴書 | 良き師・良き友に恵まれて(第10回) | 渡辺 誠 …2 | ■考古学者の書棚 | 『新しい科学論』 | 荒井幹夫 …4 |

考古学の履歴書

良き師・良き友に恵まれて(第10回)

渡辺 誠

10. 他大学の先生方と学生達(つづき)

早稲田大学でも西村正衛・大川 清・直良信夫・金子浩昌先生、市毛 勲・大金宣亮氏等々には親しくかつ親切にして頂いたが、特に東関東の貝塚の研究を精力的に進められていた西村先生に御教示を仰ぐことが多かった。特に貝塚の研究に文化人類学的観点を導入した大倉南貝塚の報告(『古代』誌所載)は、私にとってはバイブル的な存在であった。この『古代』を時々購入していたが、これを担当されていた大川 清先生が覚えて下さっており、在庫切れになりかかっている号を、お金は後でいいからと持たせてくれたお気づかいは忘れられないことである。後に栃木の窯業史研究所にも時々お邪魔して、学生時代よりも一段と親切にして頂いたことは、忘れえぬ思い出である。

戸田哲也氏も玉川大学の学生時代からの古い付き合いであるが、年と共に親密さが増している。

11. 川崎市での発掘調査

私の下宿にも遊びに来てくれる友人達がいた。そして1964年に原始文化研究会を作り、後輩の天羽利夫、岡本孝之、鈴木道之助氏や立正の関 俊彦・村田文夫や宇佐美邦夫氏、早稲田の山本輝久氏などの他に、熊本県下の発掘以来親しくなった国学院の島津義昭氏がメンバーであった。それに柳沢一男・金盛典夫・岡崎雄二郎・高山 純・滝沢 浩氏なども参加してくれることがあった。天羽利夫氏は卒業論文に土版・岩版を研究した直後であったが、たまたま川崎市初山遺跡でも1点出土しているとして、村田文夫氏が土版を持参してみんなに見せてくれた。このことが後に同遺跡の縄文中期の集落址を発掘する遠因となっている。橘高校の伊東秀吉先生や明石 新氏等の学生諸君と発掘した。そして最後の第3次は、京都の平安博物館に勤務してからのことである。これで集落の全貌が明らかになった。この時は上記の原始文化研究会メンバー等の他に、慶応の片岡鷹介・阿部祥人、京都勢の片岡馨・南 博史・長谷川 豊氏も参加してくれた。角田文衛館長や同志社の石附喜三男氏も見学にみえられた。この頃埋壘の風習も一段落し、竪穴住居の入口下に埋設することから入口が明確になり、入口には秩序があり、すべて集落の内側か外側いづれかに向くことが明らかになったが、初山遺跡の場合はすべて内向きであった。

また博士課程に在籍していた時に同市の文化財調査員に任命されることとなり、同市の教育委員会に奉職した村田氏とともに、子母口貝塚などの発掘を行い、地元の持田春吉・新井清氏達とも知り合いになった。また寿司の配達中にしばしば遺跡を発見していた舂形寿司の久保田西義氏とも親しくなったが、発掘した末長遺跡などのいくつかの遺跡は同氏の発見である。それらの発掘には主に天羽利夫・岡本孝之・島津義昭・

岡田威夫・山本輝久・十菱駿武・木村幾多郎・木村久子・小川静子・梅沢園子氏等の協力を得た。母体をもたないに等しい私にとっては、今思い出しても大変ありがたいことであった。

地方自治体において、一万分の一の遺跡分布図を作製したのも川崎市が最初であったが、東西に長い市内を東から渡辺・村田、西から島津氏が厳密に踏査した成果であった。これも懐かしい思い出であるが、この頃の私は京都に務めるようになるとはまったく考えておらず、東京近辺で就職できるなら、川崎の溝の口近辺で、みんなと楽しく暮らしていきたいと思っていた。

この頃は特に元気で、笹津先輩の手伝いで東名高速道路関係遺跡の調査に長期間静岡にいたが、数日間一時的に戻って川崎市内の小遺跡の発掘をしたこともあった。論文もよく書いた。そのうちの「抜歯風習の研究」は修士論文を基礎にしたもので、『古代学』第12巻4号に掲載して頂いた。これは先にも記したように渡来説を否定して、仙台湾自生説を主張したものであった。しかし国内考古学に無縁な方々にはやや唐突な感があった。そこで精力的に進めたのは、その考古学的な背景の追求であった。

そして江坂先生のご紹介を頂き、漁具・漁業研究の第一人者である石巻市の楠本政助氏宅へ参上した。朝から晩までほとんど座りっぱなしで、鹿角製の釣針と離れ銚約80点を実測した。これでは洗いざらい資料化されてしまう、君はもう来るなど冗談で言われたほど、当時は集中力があつた。その成果は「釣針の研究」として『人類学雑誌』第74巻第1号に掲載して頂いた。これと「抜歯風習の研究」が、私にとってのデビュー作的論文であり、後の研究方向を決定したと思う。

そして東北大勢の中には、同氏が古式離頭銚と名づけて精力的に調べていたものを鹿角製の鎌と決めつけていたために、私がこの古式離頭銚(中期)が後の燕形離頭銚へと展開すると考えたことを、大変喜んで下さった。平安博物館に奉職した時に科学研究費に当たり、さらに北の北海道に出かけることができ、骨角製漁具の全貌を知ることができ、後に「縄文時代の網漁業の研究」などと合わせて、『縄文時代の漁業』として雄山閣より出版して頂いた。処女出版である。当時の芳賀章三編集長は郷里いわきの大先輩であった。

この外洋性漁業のセンターで中期末に出現した抜歯の風習は、外洋性漁具の鹿角製釣針や離れ銚とともに後期初頭には関東まで南下し、後期中葉には東九州にまで南下するが、これ

略歴	
昭和13年11月18日	福島県平市大町(現いわき市)に生まれる
昭和32年3月	福島県立磐城高校卒業
昭和33年4月	慶應義塾大学文学部入学
昭和43年3月	同上大学院博士課程修了
昭和43年4月	古代学協会平安博物館勤務
昭和54年8月	名古屋大学文学部助教授
平成元年4月	同上教授
平成14年3月	同上定年退職、同上名誉教授
平成15年4月	山梨県立考古博物館々長・同埋文センター所長(18年3月まで)
平成18年7月	日本考古学協会副会長(平成22年5月まで)

は正しく磨消縄文(充填縄文)技法の南下と重なるが、縄文土器の浅鉢や注口土器などの器形もセットとして伝えている。

その一方西北九州への抜歯風習の伝播はやや遅れ、その背景を追って、後に韓国研究へと展開していくことになる。

隔月連載です。次回は石井則孝先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 111

泉福寺洞窟 ～ 長崎県佐世保市

村井 実

毎月隔週の日曜朝10時、千葉縣市川駅改札に各大学の考古学専攻生が集合して向かう先は研究会代表の自宅。そのガレージで今では懐かしいリンゴ箱にぎっしり詰まった小さな石器類の水洗と注記作業にあたります。下宿生にとって昼食も出るので遅れてお昼直前に行くことなど許されません。作業中は先輩方の雑談の中からこのグループに加えてもらう心構えを肌で学びつつ、石器の見方を教わりながら、これはと思う石器が出てきたら「重要品」として抽出します。夏になれば3週間のその発掘に行けるのです。

「キショーオーッ!!」という悪魔の声。昨晚眠ったかと思うとあっという間に朝を迎えます。ひ弱な新入生にとって、真夏の発掘作業は当然としても、厳格な上下関係の中で、昼夜通じトイレ以外自分の時間なしという集団生活は確かに勉強になりました。夕食時でも、概説書の背文字でしか名前を見たことのない高名な先生のご来訪は良いとして、各地から陣中見舞いに馳せ参じわが者顔?に振る舞うOB会員の面々に気遣いしながら「ご飯」は「飲み」が終わるまで食べられません。その後は、ミーティングやミニ勉強会が待っています。日によってそのあと深夜までかかって、ガリ版刷りで成果速報誌としての『発掘者』を作成して朝食時に配布しなければなりません。

そうそう、その傍らでは別の下級生が、睡魔と闘いながら延々とラベルに通し番号を書き続けています。何せここは「原位置」論による発掘を実践する佐世保市泉福寺洞窟。いかなる微細な石器も位置データを記録してから取り上げるので、一日のラベルと竹串の必要量も半端ではありません。石器集中部が出てくると一日に掘り下げられる深さも微々たるもの。ですから、移植ゴテを高速で小さく捌いて極く薄く土を剥ぎながら、微細なチップが見えた瞬間に手を止めるには連続的な集中力が欠かせません。気を緩めると毎日のように見に来る小中学生たちによって排土中から「掘り出し物」を見つけれ「ご注進」の仕儀とあいなります。

かくして故麻生優先生(1931～2000・千葉大学名誉教授)が代表の発掘者談話会による学術調査は、1970年から毎年夏休みが充てられて10年間実施されました。約2mにおよぶ堆積土中に、旧石器文化終末期から縄文時代草創期にかけてのナイフ形石器・細石器のほか、隆起線文土器と、さらにその下層から、新発見の「豆粒文土器」が出土して約12,000年前の世界最古の土器とされました。後年には伴う石器群と併せて重要文化財指定を受け国史跡にもなりました。折しも昨年、同じく佐世保市の福井洞窟(国史跡。初め



▲泉福寺洞窟

て隆起線文土器が見つかり、しかも細石器に伴出)の再調査で、旧石器時代の炉跡と石敷きが見つかったとのことで、九州西北部の洞窟遺跡群が再び注目されそうです。

8月下旬、調査最終日が近づくと泉福寺名物、地獄の埋め戻し作業です。学術発掘ですから翌年夏まで深いトレンチをまた埋めておかねばなりません。奥まわって重機が入りませんから、蝉の声と汗にまみれ朦朧となりながら円匙を振るい続けます。前日までのアカデミックで静謐な調査区が一転して修羅場と化します。解散後は東京からの往復旅費をいただいで晴れてご赦免、故郷に帰省と思いきや、九州各地から来ていたOB諸氏に「後期授業開始までまだまだあるよねえ」と言われて、今度はその自治体の発掘に一本釣りにされてゆきます。とうとう後期再開まで実家に帰らず東京にUターンした猛者もいました。発掘者談話会にはどこの誰の門下でもメンバーとして迎えられましたから、18で親許を離れた私にとっては、いろいろな大学からの先輩後輩の間で、会代表の信念である「考古学を通じて人間として必要なことを学び」ながら曲がりなりにも成長することができました。

会の発足から48年になりますが、今年に一回、代表の奥様にもご参加いただいて全国各地への研修旅行が続いています。なお、泉福寺のほかにも会ではいくつかの学術調査を行いました。それらの資料を今後死蔵させてはいけません。会員の領塚正浩氏によって、出土品と調査データを整えたいうで順次地元の自治体や関連の大学等に移管することに努めています。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは江口 桂さんです。

考古学者の書棚

「新しい科学論 —「真実」は理論をたおせるか」

村上陽一郎／講談社(1979)

荒井 幹夫

この書は、科学哲学、なかでも科学認識論の分野にかかるものであり、ハクソン、クーン、ファイヤーベントに代表される1960年代以降の新科学論に与する初心者向けの入門概説書である。なぜ、考古学とは無縁・無関係で得体の知れない書物を紹介するのかいぶかる向きもあろう。この書を紹介するのは、素朴実証主義的な科学観を批判するものだからである。われわれの研究は実証主義を旨としている。その実証主義を批判するというのであれば、わたしたちの研究方法をあらためて立ち止まり顧みるに資する哲学であると考えたからである。少なくともわたしにはそうであった。

この哲学の鍵概念は「理論負荷性(理論依存性)」である。この理論負荷性は、「観察と知覚は理論に影響されない不変の与件、経験的な知識の基盤ではなく、概念や理論を不可欠な背景とすることを要約する概念」である(『哲学・思想辞典』岩波書店)。言葉を換えていえば、われわれの行う(観察)が意識に上がらない「モデル」「知識」「推理」に負荷されており、くわえて学習に依存しているということを積極的に評価する考え方である。万人が同一のものとして見る、誰が見ても同じ(観察)やその理論を批判する。

その批判の矢面に立つのが「実証主義」である。帰納法の原理と妥協性、正統化を問うのである。素朴な実証主義によれば、科学は観察から始まる。観察が科学的知識に確かな基礎を与え、科学知識はその観察言明を基礎に帰納法によって導きだされる。批判はこの科学観を疑うことから始まる。帰納法のわかりやすい事例としてカラスがよく持ちだされる。多数のカラスを観察したが、それらはすべて黒であった。この観察結果に基づいて「すべてのカラスは黒い」と演繹する。限られた観察例を一般化するこれを帰納的飛躍というが、いずれにしても正当な帰納的推論である。しかし次に観察するカラスがピンクでないという論理的保証はない。

観察にもっとも広く用いられるのが視覚である。複数の観察者が同じものを見る、言葉を換えれば、同一の視覚経験から出発する。視覚与件はみな同じなのだろうか、ハンソンは『答えはイエスでありノーである』、イエスというのは、二人ともおなじ対象を視覚的に知覚しているからであり、ノーというのは、二人の視覚様式がきわめて異なるからである。

見ることは、単に視覚経験を持つものと同じではない。視覚的経験の持ち方の様式なのだ、と指摘する。わかりやすい具体例を挙げてみよう。ある人がある視覚経験をもつということと、その人が細菌とは何であるかを知っている、という二つの要素なくしてはそのひとが細菌を見たとは言えない。なにも知らない幼児が細菌を見たと言っても誰が信じるだろう。蛇足にもう一つ、個人的体験であるが、見学者にこれがナイフ形石器ですと解説すると、わたしには石のかけらとしか見えませんがと。

どうでしょう、「見ること」は理論負荷的(依存的)であるということに納得が、Xについての観察は、Xについて予めもっている知識によるものである。「見る」という概念は、視覚経験と概念を準備していなくてはならない。」言葉を換えれば、見るということは、絵と言葉の複合体なのであり、見る、観察するということは、(…であることを見る)、(…として見る)ということなのであり、(…であることを見る)、(…として見られ)たものがデーターなのです。「理論と解釈は見ることの中からはじめからある。」

帰納法は二つの難問を抱え込んでいる。一つは、帰納的飛躍という論理的にその正当性を保証されない難問、一つは、その基礎となる観察が理論負荷的であるという重大な難問を抱え込んだ方法であるということである。だがしかし、「帰納法はかなり多くの場合成功するという事実である。それはいったいなぜなのか、という問いは『基礎づけ』を放棄した後でも、認識論の守備範囲に入る問いと考えてよいだろう。なぜなら、その問いは、有限の事例という『証拠』から、なぜ人間は多くの場合、成功するような一般化(理論)へと到達するのか、という『証拠と理論との関係』についての問いだからである」(丹治信治 2009)

ありていに言えば、ここから先はわたしの理解力を超えている。興味をもたれた方があれば、ぜひこの問いを問うていただきたい。いずれにしても、帰納法がどのような難問を抱えて運用されているか自覚的であるべきであろう。

【参考文献】

丹治信治『クワイン —ホーリズムの哲学—』平凡社2009

N・R・ハンソン『科学的発見のパターン』村上陽一郎訳 講談社 1986

アルカ通信 No.118

発行日 2013年7月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行所 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp